

二つの雑感

余田博通

十月十六・七日の日本社会学会のお世話をされていて、殆んど研究報告を聞くことができなかつたが、たゞ二日目の第四会場を開くことができた。そのうち井森会員の「村落構造尺度作成に関する調査研究」は、いろいろな村があるという場合のいろいろな村の位置づけを、何とかやつてみたいという意図で考えられたものと思うが、私もかつて同じような意図から全く異つたやり方ではあるけれども、広島県について考え、自分では面白い結果がでたと思っているだけに、興味深く聞くことができた。インテンシヴな調査と共に、種々の角度からこのようないくつかの研究が進められると、

調査地の選定とか、調査した結果をどの程度まで敷衍することができるかというような点で、得るところが大きいのではないかと思う。

農林省の昭和三〇年臨時農業基本調査結果報告第一巻「農業集落の類型」なども、取扱い改めて検討して見る必要があるようと思ふ。村落類型の設定も、既存の統計を活用して考えうる途がありそうに思うのだが。

田原会員の「家連合と村落構造」ならびに塚本会員の「村落社会の構造分析に関する一提言」という報告は、鳴子大会の続きのような感じを持つたが、これらの報告を中心にして討論をもつと盛んにやるべきであつたと思う。当日私は、あらぬことを口走つたかも知れないが、今日になつてソラツラ願みる

第一回の討論の場になつてよいように思う。どうすればいいか、別に名案があるわけではないが、十八日の夜行で大阪発、十九日早朝学士会館のボーキさんと休憩室に入れてもらつて待つていたところ、十時まで眠つてしまつた。我にかえつたところで村研大会が始まつたわけだが、終始ねむたくて充分に聞きとつていないので、ねむたい感想になるが。

第一回目の神谷会員の「明治前期の政治体制と村落」および千葉会員の「学区に関する国家政策と村落共同体の再編成」という報告は、私の不勉強な問題であつたから、興味深く聞いたし、またすぐれた報告であつたが、兩者はどちらも明治前期の問題であつたからあとで両者の報告を中心にして当時の村落に関する幾つかの問題点を明らかにしてほしかった。また村落共同体の考え方の違いもあつたことは、日本社会学会大会も、いま少し活発な

と村落体制」、酒井・山下・大津会員の昨年

の感を深くした。

の日本社会学会に続く報告「部落日誌からみた村落「区」行政の一考察」も共に重要な論点を含んでいたと思うが、後者は私も目をつけていた部落日誌の研究だけに興味深かつた。中村正夫会員の「地方自治の拡大と部落機能」を聞いているうちに、私は部落といふものが分らなくなってしまった。何れも活字になつたものを拝見したいと思う。各報告は、それぞの論点から問題を出しておられたわけであるが、それそれがどのようにかみ合つてくるのか、自分でも整理してみたいのであるが、これは角々容易ではない。

研究通信三三号で有賀会員は、「村落と政治の問題は村落内部の政治構造と全体社会の政治構造との相関している所にあるが、村落がいつの時代にもこの外部的規制に反応してそれ自身の内部構造を創り替えて來た経過をとらえる事が大切である」と述べておられ、また中島会員が「村と政治体制の結び付きを明らかにするには、多くの要因や変数が与えられておりますが、論議を集中的にし、また村の現実から離れないためには、幾つかの戦略的な目標を設定し、これを中心に意見の交流がなされることが望ましいでしょう」と書いておられたが、政治と村落の問題をとりあげた時に、予めこういった問題を論じあつておくことが必要であったのではないか。またこのような方法論的な問題を提起する報告が一つ位あつてもよかつたのではないだろうかと思つてゐる。総括討議が終つてから時にそ

来年も再び政治と村落というテーマが選ばれるとすれば、研究通信の上で早い段に右の点を論じ合つておくことが必要ではないだろうか。なお、各会員が今年発表された論文題目とその掲載雑誌名を研究通信に特集していくなど、地方にいるものにとつて大変ありがたいのですが、皆さん是如何でしようか。